

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● 住宅再生部会の方向

大型テレビが3mも飛び、冷蔵庫が一回転して起き上がる。タンスが寝ている人を飛び越して倒れ、抽出や箆箆の中身は全部飛び出し、室内ではあらゆる物が倒れ、足の踏み場もない状態になった。壊れた家財道具がマンションのエレベーターホールなどに溢れ出していた。阪神大震災の高層住棟の被害である。高層棟の上層階は下層階の数倍の横揺れを記録した。マンションの死者は少ないが、家具の下敷きや飛散した破片で足を切る等の負傷者は多数に及ぶ。

阪神大震災で目にした現代の住空間は物が溢れていた。室内は人が生活する場なのか、物を置いておく場なのか解らない。大衆消費社会は大量の消費財が生活空間を浸食する。まるで倉庫の様に部屋の壁面にびっしり家財を置き、その中で生活していれば家具の下敷きになるのは当たり前である。こうなると消費財は凶器となり、人に襲いかかる。足の踏み場もないほど過剰な物に囲まれた住空間を再生し、人が生活する部屋には家具を置かない住い方をしなければならない。

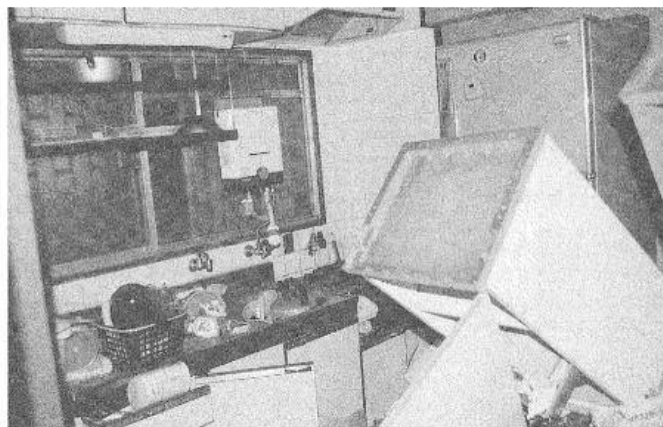
大正12年に発生した関東大震災の頃の住居は、畳の上に布団を敷いて寝起きし、ちゃぶ台で食事をする、そんな家具がない畳のスッキリした住まい方だった。戦後の大衆消費社会は住宅に大量の消費財を呼び込んだ。

住居とは人が物を「消費する場」であり、消費しきれずに「溜まる場」であり、消費された物の集積所＝「ゴミ置場」でもあると位置付けた上で、住宅を再生しなければならない。

関東大震災から阪神大震災までのわずか70年の間に日本人の住生活様式は大きく変化した。

人口の過半は農山村から都市に移動した。祖父母から孫・曾孫まで大家族が同じ屋根の下で暮らす住まいは核家族化が進んだ。食寝分離、就寝分離によりリビングルーム・ダイニングキッチンを中心とした「n-LDK」の住宅プランが一般化した。畳に座り、就寝する立ち居振る舞いはイス、ベッド型の生活様式に替り、足が長く、背の高い体形に変化した。

かかる生活様式の変化に対して、住宅をどのようにリフォームすべきか。



家具など大衆消費財であふれた室内。大地震時には凶器となる

1998年、日本建築家協会・メンテナンス部会のもとに誕生した「住宅再生分科会」では、毎月1回・戸建て住宅リフォーム事例の発表会を行い、これらの事例をたたき台に議論を重ねた。この会に新たに建築家の奥村まこと、鯨井勇、日影良孝、高橋一男、大沢悟郎、増田信彦、小堀清美、小林淳子、関谷真一、等の各氏が参加し、活動は活発になっていった。

「住宅再生分科会」は次の様な共通の認識を持ち、リフォームの方向を目指した。

1. 持家政策は、国民に住宅の使い捨てを強い、住宅の寿命を短くさせる結果となっている。
2. 住宅リフォームにより、既存建物を永く使い続けていくことが重要である。
3. 住生活様式の変化に対応し、以下の方向で住宅をリフォームする。
 - ① 高齢化に対応するバリアフリー化。
 - ② 設備性能を向上させる。
 - ③ 日当たりや風通しが良く快適な住まいとし、断熱・省エネルギー性能を向上させる。
 - ④ 建物の耐震性を向上し、大地震を受けても倒壊・損壊せず、生命・財産を保全する
 - ⑤ 維持管理しやすく、長く使い続けられるリフォームを目指す。

住宅再生分科会の建築家は、新たな建築家の分野の開拓に向けて活動を開始した。

1998年に「住宅建築のリノベーション」を出版して住宅リフォームの方向性を提案し、更に1999年には、会で検討した事例を集大成して「住まいのリフォーム事例集」(鹿島出版会)として出版し、これをテキストに住宅金融公庫のホールで「戸建て住宅のリフォーム・セミナー」を開催した。

みき・てつ

㈱共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。